

詩

【小学1年生・2年生】

特選

かげ

城東小学校1年

白井

花穂

かげはいつもわたしのそばにいる
 わたしがあるくとかげもあるく
 わたしははしるとかげもはしる
 かげはどうやってできるのかが
 わからないからおもしろい
 わたしはかげがだいすき
 だからかげがないひはさみしい

(評) 毎日のくらしのなかで、かげに気づくことが少なくなりました。作者は、自分のかげに気がついて、詩をつくってくれました。
 かげのふしぎさ、そしてかげが大好きという作者のきもちが伝わってきます。とてもうれしく思いました。

(彦根文芸協会 西村 和野)

準特選

カブトムシ

河瀬小学校2年

安田

行

カブトムシはこわい
 ねばりづよいからこわい
 思ってたよりとばない
 なかないと思つてたらないた
 水をかけたらミーとないた
 カブトムシも人をこわいと思つているだろう
 カブトムシとなかよくなりたい

(評) こん虫のなかでもカブトムシはりっぱなすがたをしていますね。それだけに強くてこわそうです。でもこの詩は、カブトムシをよくかんさつしていたから書けたのだと感心しました。すばらしいです。

(彦根文芸協会 西村 和野)



【小学3年生・4年生】

特選

にがいやつ

河瀬小学校4年

安田 絢音

わたしはあのにがいやつをそだててた
それはゴーヤ

にがいみどりのゴーヤ

きらいだけれど毎日水をやり

ゴーヤができるのを待っていた

そだてばそだつほど

あのにがいにがいにがいにおいが

ついてくる

ある日小さいみどりの実がなっていた

あのにがいやつだ

持つとゴツゴツしていた

わたしはそいつにきいてみた

なぜそんなに にがいのかと

ゴーヤは言った

「ぼくだってしらないよ

できるならば甘いゴーヤになってみたい」

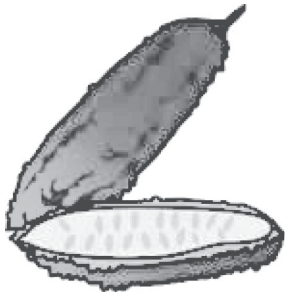
きゆうしよくにゴーヤが出ても

がんばってたべよう

(評)

大きらいだった「にがいゴーヤ」を手間と月日をかけて育てていくうちに、作者とゴーヤが親しい友達のようにつながっていく様子が、手にとるように伝わって来ます。「ある日ゴーヤにきいてみた」「できるなら甘いゴーヤになってみたい」と会話が生まれるほど深くつながっています。対称と心が通い合ったとき、よい詩は生まれるのですね。

(彦根文芸協会 谷口 明美)



準特選

電車

城南小学校3年

吉田 治旦

ぼくは電車がすき

みるのもののも

写真をとるのもすきだ

ホームで電車の正面をとる

通過電車はとりそこね

あつというまにいつてしまう

とりそこねたら

ぼくの心は

しゅんとなる

次こそは

必ずカメラで

とってみたい

自分の思いは

いろいろあるな

(評)

通過電車の正面を撮ろうと、カメラを構えている作者。しかし、「とりそこね」あつという間にいつてしまう。「ぼくの心は、しゅんとなる」などの表現から、作者の真剣さと電車が好きな気持ちが強く伝わってきます。失敗しても、なお「必ず」とつてみたい。「思いはいろいろあるな」と、つぎの活動をえがき続ける思いの深さに心を動かされます。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

準特選

わたしのおばあさんえんぴつ

若葉小学校4年

権代 優紗

わたしのおばあさんえんぴつは
とつても短い

持つところもないほど短くなり

けずり機ではもちろん

カッターでもけずれない

なぜかしんまでぬけちゃうし

びんぼうけずりがしてある

けれど

わたしは小さいえんぴつが好き

赤ちゃんえんぴつもあるけれど

引き出しのおなかからまだ出てこない

お母さんに

かえろ かえろといわれるけれど

わたしは こっそり

おばあさんえんぴつをつかっている

おこった時はこういおう

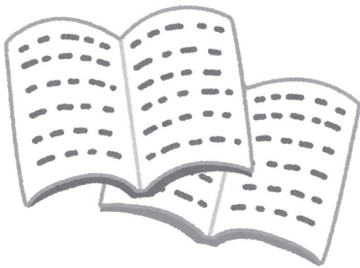
「おばあさんえんぴつも

前はながかったのよ」って

(評)

「お母さんにかえろかえろ」と言われながら「わたしはこっそりつかっている」また言われた時の言いわけまで考えながら、持つところもないほど短い鉛筆に心を通わせ、大切に使用している作者の日々の様子が、読み手にほほえましく伝わってきます。

(彦根文芸協会 谷口 明美)



佳作

考え方

城西小学校4年

瀧沢 佑太

人生で生きるための心得は

何よりも自分に打ち勝つことだ

他人にふりまわされて生きるよりも

自分の意志で動いた方が

より人間というものになれる

いやむしろ人間とは

自分を中心に考えていないか

自分の意志は持っているけれど

他人の言葉をちよびとも聞かない

いや聞けないのではないだろうか

そうだ

僕たちのような考え方の人とは

言葉が通じないのだ

僕たちが少しずつでも

そのような考え方になっていたら

僕は生まれ変わってでも

そんな人間になりたくないと

自分に言い聞かせる

たとえ世界中がおそいかかったとしても

自分に打ち勝つために

僕は戦い続ける

佳作

虫とわたし

城南小学校3年

藤田 夏漣

リンリンリン ずずの音
チーンチーンチーン トライアングル
虫たちの夜の合しよう会が始まった
昼間では聞こえない
すてきなハーモニー
わたしは 音をたてずに そっと耳を
すませて聞いている
ゆつくりな時間が流れている
今度の わたしの演奏会
虫たちのように 心にとどく
えんそう会になると いいな

入選

うちゅう人水族かん

城南小学校3年

國安 祐衣

魚や海そうがある空中水族かん
を作るつもりだったのに
と中で絵の具が頭や顔について
みんなうちゅう人になっちゃった
だから空中水族かんじゃなくて
うちゅう人水族かん
中の人みんなうちゅう人
いつもの場所にいきなり
うちゅう人がいる水族かん
きつとみんなおどろくだろうな

入選

リレー

城南小学校4年

近藤 乃々

わたしの番がきた
バトンをもらい走る
思いきり走る
おうえんの声が聞こえる
きもちいい風がくる
そしてバトンをつなぐ
みんなの思いをのせて



入選

秋をかんじる

城東小学校4年

藤田 悠介

もみじが

ひらりひらりとおちている

「もうあきやな」とぼくはおもう

松虫が

チンチロリンチンチロリンとないている

「おつもうあきやな」と

おねえちゃんがおもう

いちようの木に実が
なっている

「こんやはなべや」

母はおもう

「あきつてええね」
家族はおもう

【小学5年生・6年生】

特選

はつば

城東小学校6年

河分 小春

はつば はつば わたしははつば

花のとなりについている

みどり一色わたしです

はつば はつば わたしははつば

花は主役でめでられて

わたしはちぎつてすてられる

はつば はつば わたしははつば

それでもわたしは水をすい

力いっぱい太陽の方を向く

だれかわたしのこのみ力

気づいてくれるといいのにな…

(評) 詩を書くことつてむずかしい！と誰でも一度は口にしませんが、作者は詩を書く対称の「はつば」にすぐになりきれぬ気持ちを持っています。三連目の「力いっぱい太陽の方を向く」は、作者の力強さ・自信・魅力などを感じさせる一行となり、素敵な作品となりました。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)

準特選

くさ

城西小学校5年

中村 心春

石とちがつてくさはやわらかい
すぐぬかれてしまう

くさでもいのちはしっかりある

くさははつばともちがう

くさは 地面にはえている

葉っぱは 木についている

地面にはえているので

すぐ 人にふまれる

葉っぱは 木についているので

ちぎられるまではいのちがある

長い長い年月がたつても木は 生きている

でも くさは すぐふまれ すぐぬかれる

ああ とてもかわいそうだ

わたしだったらとつてもいやだな

(評) 詩の対称となる「くさ」にきちんと向き合っていて、上手に表現されています。最後の二行は悲観的(どこか悲しみを思わせる)ですが、かえって作者の冷静さや優しさを感じさせるよい作品となりました。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)

佳作

秋が来た

城東小学校6年

北川 那奈

きつぱりと秋が来た

夏の暑さが消え

すずしくなってきた

もみじの葉や動物にとつては

すごしやすい秋が来た

読書の秋 芸術の秋 食欲の秋が来た

どんどん秋の力を増していく秋

みんな大好きな

秋が来た

秋が来た

佳作

思い

平田小学校6年

柴田 紗希

感謝 反省

伝えたい思いは山ほどある
でも

思いのほとんどは相手に伝わらない
いつか 別れの時が来ると
分かっている

伝えられない思い

心というものは 目には見えない
思いというものは 耳では聞こえない
そんなことはあたりまえ

後回しにして 後悔しても

あの頃には もう二度ともどらない
だから今 伝えられるうちに
伝えよう

皆さんの思いを

伝えよう

入選

ひまだ

城西小学校5年

高畑 陽希

ひまだひまだひまひまだ

やることあるけどやりたくないし
宿題あるけどめんどくさい

ひまだひまだひまひまだ
友達野球をやっているけれどルールは知らない
運動苦手

ひまだひまだひまだ

ゲームはあるけど全クリしたし
トランプあるけどあきてきた

ひまだひまだひまひまだ

そうだねてしまおう

ねておきたら次の日に
次の日なったら学校だ
でも学校終わったらどうしよう

うーん ない

明日もやっぱりひまかもな
ひまだひまだひまひまだ
ひまだひまだひまひまだ

入選

おにぎり

平田小学校6年

北川 悠清

おにぎりおにぎりおいしいな
うめぼしうめぼし入れてみた
すっぱいすっぱいすっぱいな
おにぎりおにぎりおいしいな
からあげからあげ入れてみた
ジューシージューシー超ジューシー
おにぎりおにぎりおいしいな
たらこたらこ入れてみた
しょっぱいしょっぱいちよつとしょっぱい
おにぎりおにぎりおいしいな
からしからし入れてみた
こそつとこそつと弁当に
からいよからいよ大きわぎ
おにぎりおにぎりおいしいな
やっぱりおにぎりおいしいな



【中学生】

特選

ゆき

鳥居本養護学校 中学部2年

岩松 拓馬

ぼくゆき
この世界にとつぜん出現させられる
この僕を出現させているやつ あやまれ
なんていったって
ふりつもつたら 固められて投げられる
あと とける
あと こおる
あと じゃまものあつかいされる
だから あやまれ

(評) 平凡な視点からではなく、「ぼくゆき」という最初の一行、そして「とつぜん出現させられる」という二行目、そして三行目の「あやまれ」というつながりが、雪の「清純」と「はかなさ」、そして理不尽を生きるしかない怒りの美しい調べになつて強くせまってきます。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)

特選

反抗期

南中学校2年

三橋 力也

どれだけ言ってもいい言葉「ありがとう」
早く言ったらいい言葉「ごめんさい」
その言葉が口に出せない
わかつているのに：
「ありがとう」なんて素直に言えない
「大好き」なんてもちろん言えない
先が見えない不安から
気持ちコントロールできない苦しみで
時にはとがってみたりして
本当にめんどくさいむずかしい奴
真つ向から腹を割って話せば
すつきりするだろうか
はやく終わらないかな 反抗期
心が絆創膏でいっぱい
その一言が心に染みる
反抗期 それがすんだら反省期かな
本当の自分に出会えることを目指して
何処かにたどりつくことを信じて
人を想う心はきつと人を成長させる

(評) 反抗期のやり場のない屈折した気持ちを、誠実に描いています。「心が絆創膏でいっぱい」という言葉で、作者がどれほど傷ついているかがよく分かり、最終行の「人を想う心はきつと人を成長させる」という発見にとても共感しました。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)

準特選

ねこをなでたら

彦根中学校1年

塚本 結南

ねこをなでたら
毛がぬけた

ねこをなでたら
毛玉ができた

ねこをなでたら
ボールができた

ねこをなでると
くしゃみすると

わたしも ねこも
くしゃみする

自分のぬけ毛に
くしゃみする

(評) リズミカルなくりかえしの中に、暖かではのぼのとしたユーモアを感じます。「なでる」「毛玉」「ボール」「くしゃみ」、ねこの抜け毛でも楽しい詩は作れるんですね。ねこの抜け毛をまとめてフェルトのコースターを作ったねこ好きの友人を想い出しました。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)

準特選

落とし物

彦根中学校1年

鈴木 教洸

窓の外

ふと見て視線を上げると

青い海の中に

白いうろこが

落ちていた

もうすぐ大きなくじらがきて

塩をふきあげていくのだろう

そろそろ洗たく物をとり込まないと

(評) 落とし物はなんだろう。海の中の白いうろこ？ 青い空、白い雲、近づいてくるにわか雨を、他のもの(海やくじら)にたとえる方法をメタファーと呼びます。詩はメタファーでよく表現しますが、この作品は現実とメタファーをうまく組み合わせています。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)

佳作

光と闇

彦根中学校1年

岩佐 雅也

照らすよ 照らす 町を 照らす

にぎやかな町へと 照らさせる

包むよ 包む 町を 包む

孤独な町へと 包ませる

明けるよ 明ける 町が 明ける

孤独な町を 明けさせた



佳作

風

彦根中学校1年

蒲池

一義

ボールをけり ボールをけり
仲間にパスしたり
シュートをしたり
ゴールに向かってボールをけったり
走ったり
大きく広いグラウンドで
たくさんの人がいる中に僕はいて
追い風うけて走った時に
新しい世界が見えてくる

入選

虫の命

彦根中学校1年

大西

真穂

小さな部屋に
小さな虫
たった一人でやってきた
たった一つの命

入選

夜のお母さん

彦根中学校1年

舛中

暖佳

夜のお母さん
夜のお母さん
夜のお母さん
満面の笑みで
私をねかせてくれる
夜の満月が

入選

臨終間近の書物

彦根中学校1年

若松

佑弥

使い古し 山積みの書物
捨てられ焼かれ 灰となるのか
だれが死に だれが生きるか
自然と泣をさそわれる

入選

バスケットボールと共に

彦根中学校1年

海賀

芽依

ボールの音が響きわたる
私を ゴールにエスコートしてくれる
手からボールが離れた いい音がする
またあの瞬間を味わいたい

入選

起きろ犬

彦根中学校1年

若松

匠夢

僕の飼い犬は寝ている
昼間から寝ている
ぐっすりと寝ている
だらしなく寝ている
まるで人間のような姿で
車を通っても
散歩にさそっても
ピクリとも動かない
僕の飼い犬は寝ている

【総評】

(小学生の部)

今回一・二年生の応募作品は大変少数で残念でした。

詩の題材は、まい日のくらしのあちこちにあります。それを「秋のこと」などと狭く^{せま}してしまうと、心の通わない「ことば遊び」になってしまいます。ふと見つけたこと、強く心に残ったできごとなどをすなおな自分の言葉で表した時に、よい詩は生まれてきます。

中・高学年のみなさんの詩からは、作者の日々の真剣なとり組み、心の動きなどが、その人でなければ表現できない言葉で、ていねいに綴^つられていて、楽しく読ませていただきました。

(中学生の部)

一番詩を書いてほしい世代なので、中学生のみなさんの多数の応募は本当にうれしいです。今年は短い作品が多かったように思いますが、短い詩というのは、簡単そうに見えて難しいものです。少ない言葉の中で、読んだ人の想像をどこまで広げることができるか？読んだ後に余韻を残しているか？書きなれるまでは少し説明的になっても、丁寧な長い詩を書くことも大切です。そうやって書いたものを少しづつ短くしてできあがった詩は、最初から短く書いた詩よりもずっと強く美しいものになっているはずですよ。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)